

## 巻 頭 の 辞

本年4月1日に新元号「令和」が発表になり、お祭り騒ぎのような雰囲気  
がテレビに映し出された。新元号の号外に飛びつく人々、その号外をネット・  
オークションに出品する人々、発表後わずか1時間—なかには数分—で、  
令和の文字がプリントされたTシャツ、純米酒、カステラ等々が売り出され、  
すぐに売り切れた。瞬時に新商品や広告を打ち出す「リアルタイムマーケティング」  
という戦略だそうである。

なんとも明るい雰囲気の中で平成が終わろうとしているが、平成とはいった  
いどのような時代であったのだろうか。平成が終わることがすでに予定されて  
いたこともあってか、平成史を冠する書物が数多く出版されている。「なるほ  
ど」と共感させられる数多くの論点が、改めて平成を振り返ることの重要性を  
教えてくれる。しかし、私にとって平成とのもの悲しい別れを強く実感させら  
れたのは、新元号発表の2日後にリリースされた、「第5世代移動通信システ  
ムのサービス開始を巡ってアメリカと韓国の熾烈な争い」というニュースであ  
った。このような最先端技術の発表に必ず登場していた日本の名が聞かれなかつ  
たのである。隔世の感を禁じ得なかった方も少なくなかったのではなかろう  
か。このまま技術大国から転落し続けていくのか、あるいは平成30年間につ  
いての深い反省の下に復活を遂げるのか、重大な岐路にあることは間違いなか  
ろう。経済研究所は、講演会やミニ・シンポジウム、さらには研究報告その他  
の刊行物やプロジェクト研究を通じて、その成果を、重大な岐路に立つ社会に  
向けて発信していきたい。

さて、平成30年度の経済研究所は恒例の講演会を開催した。まず6月16  
日の講演会では、吉川洋氏（東京大学名誉教授・立正大学経済学部教授）と田近栄  
治氏（一橋大学名誉教授・成城大学経済学部特任教授）をお迎えし、それぞれ「人  
口減少と日本経済」、「社会保障と財政」という日本経済が直面している喫緊の  
課題についてご講演いただいた。また10月13日の講演会では、中馬宏之氏  
（成城大学社会イノベーション学部教授）と久世和資氏（日本アイ・ビー・エム株式

会社執行役員最高技術責任者)にご登壇いただき、「ヒューマン・インテリジェンスと脳模倣型及びビッグデータ型 AI: インテリジェンスとは何かを考える」と「最新テクノロジーによる社会の変革」というテーマで最新のインテリジェンスやテクノロジーの可能性を展望していただいた。これら講演会の詳細な内容は本号に掲載された講演者各氏の玉稿を参照していただきたい。さらに去年は9回のミニ・シンポジウムを開催することができた。その成果については、本号に掲載された後藤康雄氏(成城大学社会イノベーション学部教授)の玉稿や経済研究所のホームページにアクセスしていただいて、刊行物-研究報告から漸次ご覧頂ける研究報告をお読みいただければ幸いです。

最後になったが、研究所は今年度から私が研究所長を務めさせていただくことになった。微力ではあるが、新主事の相原章経済学部教授を始め、所員の方々、さらにお二人の研究所スタッフに支えられながら、また講演会やミニ・シンポジウムに積極的に参加して下さる先生方や市民の方々にご後援を頂きながら、研究所の発展に誠心誠意努めていきたいと考えている。一層のご支援とご協力をお願いする次第である。

2019年4月

成城大学経済研究所長

立 川 潔